

図書館だより

Library News No.64

Nara National College of Technology

2007年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



絵：2I 中川 雄貴

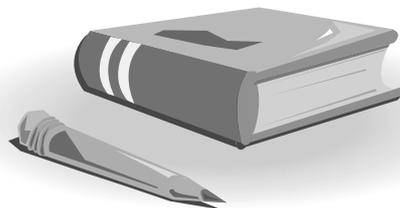
目次

巻頭言「良書」を見つける	2
平成18年度読書感想文コンクールを終えて	3
入賞作品紹介	5
学生会図書委員によるブックガイド.....	15

これまでに文芸書や専門書などいろいろな本を読んできて、「良書とは何だろうか？」とふと思うことがあります。多くの人が推薦する本、雑誌や新聞の書評が優れている本、それらは勿論良い本に違いはないかもしれませんが、他の人の書評とは関係無しに手元から離せない本が何冊かあります。読んでみて感銘を受けその後何度も読み返している小説、何気なく開いてしまう詩集、疑問があればまず開く専門書等。これらは私にとっては「良書」であり、常に身近にあり、決して裏切らない存在です。誰にもこのような、自分の「良書」が何冊かあることでしょうか。このような良書を何冊持っていますか。

「良書は友達の中の最良の友である。現在も、そしてまた永久に変わるところがない。」とも言われるように、良い書物とは1度読めば長く心に残り、座右の書ともなるでしょうし、永遠の友ともなります。ただし、万人共通の最大公約数的な良い書物は多く紹介されていますが、絶対的な最良の書物というのは存在しないでしょう。ある人の親友が万人の良き友であるわけではないのと同じように、各人にとって良い書物とは各人ごとにより異なるでしょうし、また、自分で見いださなければなりません。このためには多くの友人と接するのと同様に、出来るだけ多くの書物に接し、読書する中で、良い書物を見いださなければならないでしょう。これは1冊の良い書物が見つければ終わりというわけではなく、新たな良き書を得るごとに新たな良き友を得ることが出来ます。より多くの本に接すれば、より多くの良書を見つけ出すことが出来るでしょう。いろいろな分野の良書を見つけることは、いろんな分野の友を得るのにも匹敵することでしょう。どれだけの良書を持っているかが、将来の生活を楽しくし、仕事の幅を広めること等に、おおいに関係するのではないのでしょうか。

多くの書物を読み、その中の多くの良き書に接し、多くの生涯の良き友を得ることは楽しいことではないのでしょうか。



平成18年度

読書感想文コンクールを終えて

情報メディア教育センター運営委員会

第31回校内読書感想文コンクールの審査結果を発表します。学生の皆さんから、361編の応募がありました。情報メディア教育センター運営委員会と国語科の教員による審査・投票の結果、その中から次のように入選作が決まりました。すでに全校集会の放送でもお知らせしましたが、以下にその学生氏名と作品名を掲げ、栄誉をたたえたいと思います。

最優秀賞

物質化学工学科 2年 森本 真未 『坊ちゃん』を読んで

優秀賞

電気工学科 1年 川上 尚之 『博士の愛した数式』を読んで

電子制御工学科 1年 浦井 健次 『星の王子さま』を読んで

電子制御工学科 1年 藪田 和輝 『星の王子さま』を読んで

物質化学工学科 1年 松岡 直人 『7%の運命』

物質化学工学科 1年 松島 歩海 『感染』

物質化学工学科 1年 森岡 俊文 『SO B. IT』を読んで

電子制御工学科 2年 吉本 純一 殺人者たち

情報工学科 2年 丸石 知史 『李陵』を読んで

物質化学工学科 2年 川端 真司 『老人と海』を読んで

物質化学工学科 2年 小西 奈緒 『夜回り先生の卒業証書』を読んで

物質化学工学科 2年 西川 剛 『フェルマーの最終定理』

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得て、最終選考に残った作品もあります。その佳作となった学生の氏名を紹介し、努力をたたえます。

佳作

1 M 辻 政慶 1 M 辻本 結花 1 E 高谷吉史浩 1 E 山田 秀磨

1 S 溝留 莉加 1 S 吉本 公則 1 I 高木 隆志 1 I 林 慶

1 I 堀田 庸平 1 I 松下 貴徳 1 C 土井 健司 1 C 森本 岳

2 M 五十嵐大輝 2 M 奥中 貴雄 2 E 内野 芳郁 2 E 松本 怜典

2 S 大畑 研人 2 S 中島 往馬 2 S 松本 達矢 2 I 奥野 伸吾

2 I 田村 典久 2 C 伊藤 昌輝

以下、それぞれの入選作品について、簡単に講評しておきます。

読書感想文をまとめる時、よくある失敗として「本に振り回されてしまう」ことがあります。特にその本

が面白ければ面白いほど、あらすじをまとめきれず、内容紹介の合間に感想を入れて終わってしまう。しかし「感想文」ですから、自分の体験をふまえ、身の回りに引きつけて考えることが大切になってきます。

「私には大好きな祖母がいる。」2C森本さんの作品はこのような書き出しで始まっています。『坊っちゃん』の読者は、四国の学校でのさまざまな出来事に心躍らされることが多いのですが、彼女の文章は「清」と「坊っちゃん」との関係にテーマが絞られ、その視点は揺らいでいない。そして自分の祖母と「清」とを重ね合わせ、たった八行しか書かれていない別れの場面についても、読みを深めています。

2C西川さんは「フェルマーの最終定理」について。内容紹介をしながら、数学ひいては学問に対する人間の好奇心といったものをうまくまとめています。また、本からの引用がとても効果的に行われている点も評価できます。

若い皆さんの視点が活かされたものとしては、2C小西さんの文章が挙げられます。「夜回り先生」こと水谷修さんの本を読み、自分と同じ世代の子供が抱えている問題への無知、自分の無力さを認めた上で、それでもできることがあるのだと、私たち大人に訴えかけてきます。

また、大人が見失いがちなものを考えさせてくれるのが『星の王子さま』。1Sの浦井さんは「大蛇ボア」の話から、「心で見ると」ことについて考えています。自分の子供の頃のエピソードも文章中で活かされています。一方藪田さんは、内容全体をふまえながら、この本は大人のための本であると述べています。

タイトルに工夫が見られたのは2S吉本さん。人はなぜ殺人を犯すのか、丁寧にまとめ、その原因となる虐待についても考えています。1C松岡さんも戦争という殺人行為に対しやはり「連鎖」を絶つことを訴える。松島さんは登場人物の医者・親の気持ちを読みとりながら臓器移植の問題について考え、森岡さんは真実から目を反らさないことについて、自らの体験、現在の気持ちをつづってくれました。

2I丸石さんは司馬遷の生き方を見つめ、自分の考えを素直に書いています。また、真に信じることについては、2C川端さんが老人サンチャゴの行動を通して論を展開。そして1E川上さんは登場人物の「必死さ」という点からまとめています。いずれも「生きる」ことについて考えさせられる文章です。

全体の読書傾向としては、相変わらず『ハリー・ポッター』が読まれています。複数の翻訳が出版された『星の王子さま』、また『博士の愛した数式』の他、浅田次郎や横山秀夫などの文学作品も多く取り上げられています。あさのあつこ『バッテリー』なども人気です。話題作『ダ・ヴィンチ・コード』を読破した学生もいました。これからも「ちょっと真面目な本」も含め、たくさんの本を読んで欲しいと思います。

最後に、今年度も多数の応募作が寄せられたことに感謝するとともに、次回も引き続き学生の積極的な取り組みに期待しています。

(国語科：鍵本)



読書感想文入賞作品

『坊ちゃん』
夏目漱石 著

『坊ちゃん』を読んで

2C 森本 真未

私には大好きな祖母がいる。でも、遠くに住んでいるからたまにしか会うことができない。

家の近くには小さな川があって、ザリガニやカエルがいる。私には自然がいっぱいの小川に見えるけど、祖母にとってはそうじゃないらしい。昔はフナやメダカもいたらしい。

『坊ちゃん』を読んだとき、清が祖母とかさなつた。坊ちゃんを一途に思う清と、私を大切にしてくれる祖母。暖かく包んでくれる人、それが二人の共通点だった。

坊ちゃんは四国の学校に行くことになる。清とは離れ離れに暮らすことになる。駅で清と別れる場面がとてもよかった。この場面の描写は八行だけである。別れのときの二人の心理はかかれていない。

でも、さまざまなことが行間からあふれ出ているように感じた。読んだ人がそれぞれ別れのせつなさ、さみしさを感じることができると思う。「小説は行間を読め」とゆわれるけれど、それがはじめて理解できる場面だった。

清は別れのときに「もうお別れになるかもしれません。随分ご機嫌よう。」と声にならない声でゆう。

そのときの別れは、今よりもずっと悲しかったのだろうと思う。電話もなく、手紙も今よりもずっとかかる。もしかしたら清は、字が読めなかったかもしれない。蒸気機関車で行く四国は、すごく時間がかかるものだろう。列車が動きだしても清はずっとホームで見送っている。

祖母の家から帰るとき、祖母は手を振って見送ってくれる。

別れの場面の最後の一文、「なんだか大変小さく見えた」の表現がなんだか切なかった。子供のころには大きく感じた祖母が、今年会ったとき、何だか小さく見えたからだ。大きな存在だった人が小さく思えてしまう、はじめて感じるさみしさだった。坊ちゃんもそう感じたのではないだろうか。

赴任先の四国で坊ちゃんはいろんな騒ぎをおこす。江戸っ子の気の短さと正義感を感じる。四国を離れるきっかけとなった赤シャツと野だへの天誅劇は、一見すると坊ちゃんの勝ちに思えるけど、学校を辞めたのは坊ちゃんだ。坊ちゃんの行動はイタズラのようなものだ。

『坊ちゃん』は一人称でかかっている。だれかに語りかけているように…。その相手は清だと思う。四国での騒ぎを「清がいなければやっぱりオレはだめだ。」と自嘲気味に話している姿が思い浮かぶ。だから、四国でのできごとは、解決しようが、しまいが、どうでもいいことだったのだろう。

最後のページに「清のことを話すのを忘れていた。」とある。ここから終わりまでの十一行に清との再会、その後の生活がかかっている。私はこの十一行に清と過ごした年月の思いが詰められているように思った。

四国での生活よりも、清との生活のほうが長かったはずである。たった十一行の行間には長い年月がかかっている。そして、その十一行で一人一人が大切な時間を思い浮かべればよいのである。過ごした時間は短いかもしれないけど、行間に含まれるだけの時間と同じくらい大切な思いがそこにはある。

『博士の愛した数式』

小川洋子 著

『博士の愛した数式』を読んで

(掲載辞退)

1E 川上 尚之



『星の王子さま』
サン・テグジュペリ 著

『星の王子さま』を読んで 1S 浦井 健次

主人公である「僕」が六歳のとき、自分の想像力に富んだ「ゾウを丸呑みにした大蛇ボア」の絵を大人に見せても笑われるだけであった。その絵を見て恐ろしいと思えるのは子供だけであつた。何故このようなことになるのだろうか。それは、大抵の大人は外見しか見て取ることができないからだ。だから、大蛇に丸呑みにされた、腹の中のゾウは見ることができず、まるで帽子のように見える大蛇の輪郭だけで「これは帽子だ、ぜんぜん恐ろしくない。」と判断してしまふのだ。しかし、たとえ内側の説明を加えても、大人にとって現実に合わないことに過ぎない。

世の中で、いったいどのくらいの子供が、このような大人の現実的な見方のために、自分の夢を捨ててきたことだろうか。恐らく、捨っても拾いきれないほどの夢が捨ててこられたことだろう。そしてその夢たちは、かつての輝きを失い、まるで、心無い人々によって無造作に捨てられた浜辺のごみのように、いたるところに散散し、誰にも拾われることなく静かに朽ち果てていくのだろうか。この現状を放っておくと、世の中に数多く存在する現実的な見方しかできない大人たちによって、希望に満ちたたくさんの子供たちの夢が失われてしまうのではないだろうか。どのようにすれば、子供たちの夢をそういった大人の偏ったものの見方の中で守ることができるのだろうか。

そのためには、そういった大人たちが、子供に対して現実的な見方をするのではなくて心で見ることができるようにならなければならないのだと思う。では、どのようにすれば大人が子供に対して心で見ることができるようになるのだろうか。そのためには、そういった大人は、もっと子供に時間を費やせばいいのだ。現代を生きる大人は皆、日々多忙な生活を送らざるを得ない状況にあることは分かっている。しかし、毎日少しでもいいので、子供と話し、子供と遊んでいれば、子供に対して心で見ることができるようになるだろう。なぜなら、子供と過ごした時間と、子供との絆の深さは比例しており、

子供と深い絆を持った大人は、子供の服装や体格、顔といった目で見ることが出来る外見的なものの見方だけでなく、子供の考えや思い、感情や可能性といった心でしか見えない内面的なものを見方、つまり、心で見ることが出来るようになるからだ。僕が四、五歳くらいの頃こんなことがあつた。親戚の伯母さんに半日ほど預けられたときの話だ。急におぼつかない表情になった僕を見た伯母さんは、僕が何を思っているのかまったく分からず困り果てていた。しかし、僕を迎えに来た母は一目でそれを悟り、宥めてくれた。お婆さんは僕を心で見ることができなかったのであろう。つまり、絆を結ぶことによって、初めて「一番大切なことは、目に見えない。」というキツネの言葉の「目に見えない」部分が見えてくるのである。

そうなれば、大人は、現状や外見だけを見てそれに見合った夢に、子供の本当の夢を、批判、訂正するようなことはなくなるだろう。そして、子供たちを心で見ることによって、以前よりずっと深く、子供のことを考えることができるようになり、捨てられる夢も減ることだろう。

この世の中で、夢を大切に生きていくためには心で見える力が必要だ。そしてこの力は人間誰もが持っている。しかしその存在を、大人は忘れてしまっている。絆を結ぶことも忘れてしまっている。それらを見つけ出すために、自分を再発見するために、努力し時間を費やそう。そうすれば、おのずと、子供たちの「夢」が輝きを取り戻すことだろう。

『星の王子さま』
サン・テグジュペリ 著

『星の王子さま』を読んで 1S 藪田 和輝

僕は「星の王子さま」を読んで、奥が深い本だと思った。この本は、そのタイトルにもあるように、petitという形容詞が似合う、短い絵入りの小説だ。といっても、この小説が、ここに出てくる「小さな王子さま」の絵に描かれているような、小さな子供が読むのに相応しいものだとは、僕は思わない。ところがこの小説はどうやら子供向けのお話のように受け取られているらしく（僕も読んでみるまではそう思っていたが）、それで世界中の子供に広く愛読されてい

るとしたら、それも理解できない事だと思う。この本は本屋の児童書コーナーに置かれて子供達の圧倒的な人気を占めるような性質の本ではないはずだ。

世の中には、大人が子供向けに書いた「童話」があるが、この本は童話ではない。その事は作者も最初に断っているように、子供の姿の王子さまが主人公だからといって子供向けのお話ということではなく、これはあくまで大人が読む小説なのだ。星の王子さまは小さな男の子の姿をしているが、本来の存在は、大人と対立する自分、つまり「反大人の自分」なのだ。作者もこの見方で、王子さまから見た「ダメな大人」の典型例——王様、自惚れ男、大酒飲み、実業家、地理学者などを次々に登場させ、王子さまは彼らを訪ねて、噛合わない問答をしては、〈大人ってやっぱり変だ〉と呆れ返る、という滑稽な話を並べている。

王子さまはいくつかの星を訪ねていろんな大人に出会うのだが、それによって自分を変える、大人の間で生きられるように成長するといったことは全くない。王子さまはどこまでいっても純粋な「反大人」の子供のままだ。そして、子供が正しく、大人はおかしいという確信を固めていく。そんな王子さまから発せられるメッセージは、「大人にはわからない」といった、ありがちな文句だろう。

この小説は、こうして「反大人」、あるいは子供の立場から大人と現実世界を否定するという形で書かれているように見えるが、そんな簡単なものでもない。そもそもこの王子さまは、パイロットの「僕」が砂漠で不時着して、死にかけの状況で出現する。ということは、「僕」が死を覚悟した時に自分の中に発見した「反大人の自分」、大人の世界と対立する本物の自分である「子供」が、王子さまの姿をして現れたと考えられる。「僕」はこの「子供の自分」と会話し、八日間を共に過す。ここでは、王子さまがある小惑星からやってきたという、いかにも小説らしい枠組みになっている。だから流れとしては、やがて王子さまが星に帰る日、つまり「僕」と王子さまが別れる日がやってくることになる。王子さまが天に昇るには、身体は重くて持っていけないので、毒蛇に咬まれて死ぬという手段を選び、悲しい別れとなる。だが、それは仕方

ない事だ。飛行機の修理に成功し、「僕」が現実世界に帰ることになったからには、王子さまを何らかの形で処分する他ないのだ。王子さまが星に帰るのは、この小説としては自然な結末だと思う。こうして大人と子供の対立は現実世界でのトラブルにならずに砂漠の中に置き去られる。もう一人の自分を処分した「僕」には透明な悲しみだけが残る。この結末は、小説としては見事なものだと思う。

そんなわけで、この小説は子供が書いたものでもなく、子供のためのものでもなく、四十歳を過ぎた男が書いた、大人のための小説だ。この小説は、大人が自分の中にいる子供の正体を診断するのに役立つそうだ。この作品が広くかつ長く読まれてきた秘密の一つはそこにあるのではないかと僕は思う。

僕も、立派な大人（王子さま曰く「ダメな大人」）になって、もしもサハラ砂漠を旅することがあれば、僕はきっと見つけるだろう、笑っていて、金髪で、質問しても答えてくれない男の子に。そしたら「僕」に手紙を書こう。彼に会ったよ、と……

『7%の運命』
菅野茂 著

『7%の運命』

1C 松岡 直人

この本を読む動機になったのは戦争について書かれているからである。それと「7%の運命」という題名に惹かれた。今の世代の若い人には忘れかけられている戦争について興味を持ち読もうと思った。戦争について知ることによって平和のありがたさがどれほどのものかを知りたいと思った。今まで知ることがなかったことや残酷な展開、そして死と隣り合わせの場面は、綿密かつドラマでは絶対に描くことが出来ない。この本は著者である菅野茂さんが自分の体験したことを体験記として書かれたノンフィクション作品である。この体験記には菅野さんが東部ニューギニアに兵隊として派遣されて敵兵と戦うことはもちろん、先住民との触れ合いや戦い、軍隊の実態が描かれ、そして密林の中で生き残ったことが書かれている。密林では一歩間違えば死を意味することが忠実に描かれている。題名

の「7%の運命」は東部ニューギニア派遣軍十四万人余りのうち生存者は一万人余り、生存率7%と言われていてそれから由来している。

印象に残った場面がいくつかある。その中で三つだけ挙げる。一つ目は軍隊に所属している者は上官の命令が絶対であること。それは上官に機嫌を損ねることをしたらその場で加減なく殴られる。菅野さん自身も殴られて、右耳の聴力を失い今もなお、聞こえないという。これは今では考えられないことである。今では人の生命活動を守る法律、憲法がある。だがこの時代は戦争という、人の考え方を狂わせる世界であったが為に被害があちこちにあったと思える。そして傲慢な上官がいて、自分の思い通りにならなかつたら部下のせいにする。部下思いの人もいたとあるがごく僅かであろう。こんな立場にあつたら耐えられずに逃げ出したくなる。でも逃げると逃亡罪として国に捕まる。耐えざるを得なかつたんだと思う。お国のため、天皇のために。そんな厳しい状況を耐えぬいた昔の人は凄いなと思った。耐えるというよりよく生き抜いたと言うほうがいいかもしれない。今の僕の弱い気持ちでは絶対に耐えることが出来ない。何よりも昔の人と違って支えがないから。多分僕と同じで耐えることが出来ない人は今の高校生に半分以上いるかもしれないと思う。なぜなら今の日本は平和で、外国では戦争をやっている生で見たことがないから苦しみがわからないからである。

二つ目は食べ物のこと。知っている人は多いと思うが戦争のときに民衆には食べ物が少なかつた。それは兵隊にも言える。菅野さんの体験によると、東部ニューギニアの生活において食べ物には一番苦勞しているように書かれている。それは塩が大事にそして貴重な物と書かれているからというのもひとつである。塩と銃の弾薬いくつかを交換している場面があり、手に入れるのが難しい。食べ物にありつけたとしても、味がなくては食べる気が失せる。考えてみると今僕たちの食べている料理のほとんどに塩がかかっている。もし今、塩が不足して塩のない料理になったら物足りないだろう。実際に体験してみなければ分からないが想像してみると大変なことである。

三つ目は戦争が人を狂わせること。厳しい戦

時下では二つ目に書いた通りに食べ物が少ない。この空腹を埋めるために人は変わってしまう。味方であるはずの日本兵に襲われるという風説、世話になっている先住民の犬を密かに喰って食べる。逃亡兵として疑われた同じ仲間を蔑み、罪人視し病死させてしまうなど。挙げてみるときりが無いほどたくさんある。こんなことが行われていたのである。一番酷いのは同じ仲間なのに逃亡兵として疑われて殺してしまったことである。菅野さんもそのときは逃亡兵としてみていたから自己本位になり、他の人のことが考えられなかつたそうで疑われた日本兵は先住民に運ばれていった。だが三日後に死亡した。菅野さんは同じ仲間なのになぜ同じ立場になって同情できなかつたのか後悔している。今学校でいじめというのがあるがそれと非常によく似ている。だけど違うのは、いじめはそのいじめている人が楽しんで個人的にやっているのに対し、戦争の場合は、まるで罪人扱いでそれが不名誉なことと認識させられる。だから冷静に自分の考えが持てなくて集団的に考えが変わっているのだと。つまり周りの考えが同じだとそうだと思い込んでしまう。そんな風に僕は考える。

この三つだけみると全てのみなが変わってしまったと思われるがそうでもない。人の思いやりもあり、助けてくれる人もいる。菅野さんの体験によると、自分が立てなくなり意識がもうろうとしているときに、ある隊長が自分を励まし自分のために鳥を探してきて鳥のスープを作ろうとしてくれたという。その人のおかげで力が出て自分で歩けるようになったと。こんな人間味溢れる人もたくさんいた。ちなみにその隊長さんは復員後、恵まれない子供のために福祉関係の仕事に就いたという。

戦争というものは恐ろしいことが少しわかつた。なぜ少しかというところの本に書いてあることはほんの少しのことでもまだ僕の知らないことがたくさんある。だからこれから機会があれば絶対に戦争のことをより知ろうと思う。このことが語り継がれなくなつたときは又同じことが繰り返される。人が人の手によって殺されることほど残酷なことはない。そう思う。

『感染』
仙川環 著

『感染』

1 C 松島 歩海

「感染」という医学サスペンスであるこの本を、初めはいったい何がどういふふうに感染するのだろうか、興味をもち読んでみました。外科医の子どもが臓器移植後、誘拐され遺骨になって母親のもとへ帰ってきた時、ふつうの幼児誘拐殺人事件ではないだろう、何かのウイルスに感染したのではないだろうかと思いました。そして、悲しい愛情のようなものを感じました。いったい誰が子どもを誘拐し、殺してしまったのだろうか。次第にこの本の中にのめり込んで行く僕がいました。

臓器移植を受けた人は、免疫抑制剤を服用するため、いくつかの菌の感染を受けてしまうということも、この本を読んで初めて知りました。なるほど、感染という話が進んでいくのかと思うと、大きな期待と少し怖いような気持ちになりました。

外科医は、わが子を助けたいために妻と離婚し、ウイルス研究を専門としている女性と再婚し、最新の知識を得ようとしていました。日本では、子どもの臓器移植は受けられず、死を待つしかないわが子を見殺しにするか、異種移植という禁じ手を使って治療するか、迷った揚句、外科医は豚の臓器を移植することにしたのです。異種移植は、拒否反応がでないように、遺伝子を細工した豚の臓器を人間に移植するという、決して許されるものではないことなのです。

結局、恐ろしいウイルスに感染し、子どもは殺されてしまいました。亡くなったわが子を自分の手で焼いて、遺骨だけでも母親のもとへ帰してやりたいと思ったこの父親に、親としての深い愛情を感じました。

「どうして子どもの臓器移植は認められないんだ。どうして臓器を提供してくれる人が少ないのか自分には分からない。脳死になったら判定ミスでもない限り、生き返ったりはしない。それなのに誰も彼もが心臓や肝臓を灰にしてしまう。俺のこの手は何のためにある。俺は手術をうまくやってのける自信がある。心臓の提供をしてもらえれば、何人の命を救えたか…、患者を見捨てて平然としていられるほど俺は強く

ない。」

外科医のこの言葉に僕は何か胸が熱くなりました。確かに、臓器移植をすることによって、多くの命を救うことができるだろうと思いました。でも、もし自分の子どもが亡くなったら、きっとそのままの姿で見送ってやりたいと、親であれば、親であるからこそ思うかも知れないと思いました。だから、臓器を提供する人が少ないのではないだろうか、というそんな気もしました。

子どもの命を守るためならば、どんなにお金を出してもいい、どんなことをしてでも生かしてやりたい、そう思う親の心を利用して南米で子どもをさらい、臓器売買をしたり、臓器移植をするためには、臓器を摘出する側と移植を受ける側の白血球の型が似ていなければ拒絶反応が起こるため、ボランティアを装って健康診断を無料で手がけ、血液を採取し、めぼしい子どもを見つけ出したり、異種移植という人体実験を行ったりする人間がいるということに、強い怒りを感じました。

結果的には、ウイルスの存在を隠すために、外科医の父親も殺されてしまい、何ともいえないむなしい気持ちになりました。医学界の危険さとウイルス感染の恐ろしさをつくづく感じました。

最近、いろいろな研究がされているが、『人の命をもてあそぶような結果にだけはしてはいけない』という最後の言葉に、僕は安心し、ただうなづくだけでした。

『SO B. IT』

サラ・ウィークス 著

『SO B. IT』を読んで

1 C 森岡 俊文

僕は真実を突き止めるようなことが出来ません。真実はいつも良い結果とは限らないし、悲しい現実や苦しい状況に遭遇することもあるからです。だから、いつも目と耳を塞ぎ、逃げ道ばかり探してしまう。真実から目を逸らし続けることは、とても楽です。ストレスを感じなくて済めば、何も考えなくていいから。しかし、どういうわけか、日常生活の中で不安になってしまう。僕にとって真実とは一体何だろう、と

思ったことがあります。

この本を読んだとき、僕は主人公のハイディがとてもたくましく見えました。ハイディは十二歳で三千二百キロもの道のりの、真実を探す旅に出るのです。旅に出なければならなかった原因はハイディの母にありました。

ハイディは自分の出身地や誕生日、父が誰かさえ分かりません。生まれて物心がついた時には、脳に障害がある母しか、ハイディのことを知らなかったからです。ハイディの母は二十三の言葉しか話せません。その中で、「スーフ」という意味の分からない言葉を頻繁にハイディに言い続けたのです。ハイディはその言葉の意味と自分自身のことを知るために、母が昔いた養護施設場を目指して旅に出るのです。

しかし、この旅は悲しい結末で幕を閉じました。ハイディが知った真実とはハイディの父もまた障害者であり、「スーフ」とはハイディの父が母の名前を発音できなくて「スーフ」と言っていたのです。おそらく、母がハイディに「スーフ」と言っていたのは、彼らにとってその言葉は愛を表す言葉だったのでしょう。けれど、ハイディが帰宅する直前に、母は死んでしまったのです。しかし、ハイディはこの旅で何かを失ったり得たりするなかで、大事なことに気づき受け入れたりしたのです。

僕は、決して楽しいばかりでない感情とも折り合いをつけ、時おり旅に出たこと自体を後悔しながら、何かに突き動かせるように前へ進んで行くハイディの姿に感動しました。ハイディの姿こそ、人の成長の過程に必要なものだと思います。何も行動しなければ前には進めない、前に進む＝成長することとは、真実を突き止めようすることだと、ハイディから学びました。

僕には祖母がいません。今振り返ると、昨日まで一緒に笑っていたような気がします。けれど、僕は祖母が亡くなったという真実から目を逸らしてしまいました。祖母の最後の優しい笑顔を見ずに、ずっと部屋に閉じこもって…。しかし、今でもそのことを後悔しています。

僕は知らないうちに真実から逃げようとして、大事なものを見失っていました。何も前へ進もうとせず、ただ自分の都合の良いように物事を進めてしまっただけ…。しかし、この本を読んで変わろうと決心しました。

僕は先輩に退部することを告げました。勉強も途中で投げ出しました。そして、強豪と名の高いサッカーチームに入団しました。僕の心からは一片の不安もありません。なぜなら、この決断がこれからの長い道のり—真実を探す旅だからです。一歩だけ前進できた気がします。

『脳が殺す』
ジョナサン・H・ピンカス 著
殺人者たち

2S 吉本 純一

「脳が殺す」という本を読みました。人はなぜ殺すのか。この本は人の心にスポットを当て、殺人犯は裁かれるべきか、治療されるべきかという根本的な問いを投げかけてきました。

新聞を開くと、最近話題になっている少年犯罪の特性は、昔のように粗暴犯や衝動犯ではなく、むしろ頭の良い子がきわめて理性的にとんでもないことをしでかしている、という点に特徴があります。こういうことが珍しくなくなり、日常茶飯事の当たり前の出来事になろうとしている今日この頃です。これは悲しい事であり、恐ろしいことなのです。

人はなぜ殺すのか。この本の著者は殺人の起こる原因について、「被虐待体験」「神経学的損傷」「精神障害」を挙げて、それが暴力を惹き起こす三要因という仮説を立てました。この仮説を裏付けるために、これまでになんと百五十人もの殺人犯と面接しているのです。この数は半端ではなく、そして、その大半にこの三要因が見られたというのです。ただの偶然とは言えません。暴力の源を探る研究において虐待は驚異的なまでに重要な要因で、今のところ虐待を越える要因は見つかっていないそうです。児童虐待は、子供の心理に破壊的な影響をもたらすばかりではなく、その悪影響はその子供が長じても続くと言うのです。人は生まれてすぐに、これから送る人生を決めることができるわけではありません。

「もしも、自分が虐待を受ける立場だったら…。」考えただけでも逃げたくなくなってしまいます。しかし、子供の頃に虐待を受けた人が皆暴力的になるわけではまったくないのです。虐待された経験を持ちながら、正常な人生を送る力とい

うものが人間にあるということは、それはとりもなおさず人間の精神の回復力、人間の脳の可塑性に他なりません。とても素晴らしいことだと思います。それでも、暴力に走り社会的に危険な存在となる者が彼らの中に多いというのもまた事実であるところを見ると、被虐待体験とその後の暴力には明らかに直接的な因果関係があると思われま

す。悲しいことに、この暴力の三要因「被虐待体験」も、「神経学的損傷」も、「精神障害」もどれも本人には責任を求められないことなのです。自らの意思で、子供の頃から虐待を受けたがったり、生まれながらにして神経や脳に損傷や障害を得たがるものなどいません。となると、どれほど残酷な殺人を犯そうと、これら三要因を持った人間に限っては、本人に責任を問うことはできないということなのです。簡単には解決できないが、簡単に解決してはならないジレンマなのです。暴力を無くすために、暴力の三要因の一つである「虐待」撲滅というやり方があるのです。暴力が暴力を生むように、虐待もまた虐待を生む。かかる虐待が暴力を引き起こす重大な要因であるなら、それを断れば暴力の連鎖も断てるはずというわけです。

この本を読んで、殺人者に同情してしまいました。さらに、この本で殺人者たちが告発する被虐待体験のすさまじさを思うと、一つの疑問が湧いてきました。もしも、これらの殺人者達が虐待家庭に生まれてさえなければ、彼らにも僕たちと変わらない平穏な人生が送れていたのではないか？もちろんこの答えは簡単には出ません。虐待が無くなれば、ただそれだけで地球上から暴力が姿を消すとも思えないからです。今の時代だからこそ読むべき本だと思いました。



『李陵』
中島敦 著

『李陵』を読んで

2 I 丸石 知史

この本は漢の時代に生きる三人の男について書かれたものです。敵軍との戦いに敗れ捕虜となった李陵、李陵を弁護して刑罰を受けながらも史記を完成させた司馬遷。そして、李陵と同じく敵軍に捕らえられながらも降服しなかった蘇武の三人です。この三人の中で、特に私が注目したのは司馬遷の生き方です。

李陵が捕虜となった時、武帝はこのことで激しく怒ったため、李陵に親しかった者であっても李陵を弁護することはありませんでした。李陵を弁護することで、自分が刑罰を受けることを恐れたためです。しかし、司馬遷はただ一人李陵を弁護しました。そのために刑罰を受けることになってしまったのです。

なぜ、司馬遷は李陵を弁護したのでしょうか。司馬遷と李陵はそれほど親しかったわけではありませんでした。それに、武帝に反してまで李陵を弁護しても、彼にとって得なことはあるように思えません。むしろ、李陵を弁護したことで刑罰を受けてしまったのです。

こうした行動は司馬遷が自分に正直であるということを示しているように思います。自分に正直であるがゆえに、武帝に反抗してまで李陵を弁護したのでしょうか。もし、私が司馬遷と全く同じ状況に置かれたとしたら、司馬遷と同じように李陵を弁護できるだろうかと考えてみました。私はできないだろうと思います。武帝に反抗することで刑罰を受けてしまう、周りが弁護しないなら自分もそうしよう、といった考えが浮かぶためです。このように考えてみると、自分に正直に生きることの難しさを思い知らされます。また、自分に正直になるには勇気も必要であると思います。司馬遷のように刑罰を恐れない勇気、そして自分が正しいと信じ、自分の信念を貫く勇気です。周りの者に流されず、自分の信念を貫くことも容易ではありません。私は周りに流されてしまいやすいので、そのことはよくわかります。周りに流されてしまいやすいのは、自分が孤立することを恐れているからなのかもしれません。集団の中に入れば安全だと思ってしまうのです。これは、私には司馬

遷のような勇気がないことを示しているのでしょう。司馬遷のような生き方をするには、まず自分の信念を貫く勇気が必要なのです。私は司馬遷のように自分に正直に生きる生き方を素晴らしいと思います。

しかし、その一方で「長い物には巻かれろ」ということわざもあります。権力のあるものには反抗せず、相手の言うとおりにしておくが無難であるという意味です。このことわざの通り、司馬遷も武帝に反抗せず李陵を弁護しなければ、刑罰を受けることはなかったでしょう。このことわざは、自分を守るという点から見れば正しいように思います。自分に嘘をついて自分を守るのも一つの方法なのでしょう。

自らを危険にさらしても自分に正直に生きるほうが正しいのでしょうか。それとも、自分に嘘をついて自分を守るほうが正しいのでしょうか。私にはどちらが正しいのかわかりません。ただ、人間は結局自分を守るほうを選ぶものなのかもしれません。まず、自分の安全を最初に考えてしまっているのではないのでしょうか。司馬遷の生き方は、この考え方と全く反対です。だから、そのような生き方をした司馬遷を立派だと思います。しかし、彼のとった行動が本当に正しいのかと問われると、私は答えることができません。ですが、私は司馬遷のように自分に正直に生きたいと思います。

『老人と海』

アーネスト・ヘミングウェイ 著

『老人と海』を読んで

2C 川端 真司

この本を読んで思ったことは、不器用に生きる人は言い換えれば、自分を信じ認める人ということです。というのも、この物語のように、ある局面にぶつかった時でも、様々な感情を整理し、それらを信じ認めて生きるサンチャゴのような人は少ないと思うからです。

「老人と海」の舞台はキューバ。不漁の続く老漁夫サンチャゴは、かつて行ったことのない程遠い海へ長年の勘を頼りに一人で大物を狙います。独り言を呟きながら大物を待つと、確実なアタリを得ます。その後、その大物カジキマグロと死闘を繰り広げます。老人のカジキマグ

ロとの会話は正に闘いそのものです。

老人はこれまで目にした事のない大物にも、平常心を保とうと必死でした。体力のためにも、生魚を懸命に食らい自らの勘と腕を信じ、四日間も釣り糸を放すことなく巨大なカジキマグロに挑みつづけます。このような姿も、不器用でも正面から向かっていく強さ、勢いを象徴するものだと思います。そのような描写がこの作品を有名にしたのだと思います。

その後、老人はついに大物に勝利します。老人にとって闘いは崇高なもので、人生そのものともいえました。しかし、凱旋気分で意気揚々としていた老人に幸運は最後までついてきません。カジキマグロの血の匂いを嗅ぎつけた鯨の大群に、殆ど半分以上食い荒らされてしまいます。老人にはもはや体力もなく、非力な自分を責めるばかりです。港についたときにはその残骸があるだけで、あの崇高な闘いとは対照的なものでした。

カジキマグロを仕留めるその瞬間に、老人は「これが叶えばもうなんでもする。」という気になりました。それも、自分の限界を最大限にし可能性を最大限に引き出すという強い気持ちと、自分を信じる強い精神力があったからだと思います。老人が船上での夢でライオンを追いかけようとするのは、まだやれるという意志の表れでもあるように思います。

この本では（「カジキマグロとの闘い」と「帰港中の鯨との闘い」）が老人の人生を象徴しているのではないかと思います。「カジキマグロとの闘い」は老人が若年の頃の人生です。居酒屋で大男と腕相撲をし、見事に勝利したあの頃です。そして、「帰港中の鯨との闘い」は今の老人の姿です。鯨に食い荒らされたカジキマグロが老人とオーバーラップします。

しかし、どちらの闘いでも老人は自らを信じ、懸命に闘いました。常に自問自答をし、自分を見失うことのないよう意識を集中させました。けれども、鯨との闘いでは自然の強さ、自分の非力を知りました。老人はそれを素直に受け入れ、認めました。

現代社会では、自分を正しく信じ通したり、素直に自分を認め理解するという力のない人も少なくないと思います。僕自身も自分を素直に認められないと思うところも多くあるように思

います。このサンチャゴのような人が多くなれば、事故や争いも少なくなると思います。なぜなら、自分を信じるということは相手を信じるということ、自分を認めるということは相手を認めるということから始まるからです。そういう考え方が、より良い環境を作り出してくれると信じています。

『夜回り先生の卒業証書』
水谷修 著

『夜回り先生の卒業証書』を読んで 2C 小西 奈緒

私は、「夜回り先生」こと水谷修先生の本を読みました。水谷先生は少年少女の非行・犯罪を防ごうと夜の街に出かけ、夜中になっても家に帰らず、たむろする少年少女に声をかけて回る「夜回り」を始めて十数年になられます。その間に出会い、相談を受け、時に亡くなっていった人たちのことについて語り、現代の日本が抱える問題を指摘したのが「夜回り先生の卒業証書」です。

先生は、もとは普通高校で教師をしていました。ある日、夜間高校で教師をしていた友人から相談を受け「子供が腐っていてまともな授業ができない。」という言葉に先生は「俺が夜間高校に行く、お前は教師を辞めろ！！」と激怒し夜間高校に移動、夜間高校に通う生徒達を授業が終わった後、家に帰らせるために街に出て声をかけ始めたのが「夜回り」のきっかけです。そのうち「自分の生徒」という枠を越え、悩み苦しむ生徒の相談を電話やメールで受け、今の活動の形がほぼ完成しました。

相談は、月に数万件にも及ぶそうです。先生はその一つ一つに返事を返し、決して手を抜きません。それは相談内容を見ればすぐに納得できました。「死にたい。」「苦しい。」そんな言葉がほとんどです。「僕のところに相談メールを送ってくる子供達は学校でも家でも居場所がなく孤独なんです。その子供達を見捨てたら彼らが行く場所は本当になくなってしまう。」先生のこの言葉に始め私はただ、親切な人、よくできた人として認識しませんでした。しかし本を読み進めていくと私は愕然としました。先生の親指は潰れています。それは暴力団に入っていた子を脱退

させるときに組員に潰されたものなのです。なぜ先生は自らを犠牲にしても子供を救おうとするのか、私は疑問に思いました。しかしその疑問は次の先生の一言で一気に解けました。「初めから腐っている子供なんていないんです。ゆうならば、大人に腐らされた子供達なんです。彼らは居場所がなく孤独で、だから夜の街にでて自分を必要としてくれる大人の指示で犯罪を犯す。薬に手を出す。中年の男性に体を売ってしまう。それは周りに認めてくれる大人がいなかったからなんです。だから僕は、お前のこういうところ好きだよ。お前かっこいいよ。というんです。」

先生は、他の大人が犯した「子供を腐らせた」という犯罪を見つめ、自分の責任とし、子供を見つめない大人に警鐘を鳴らしているのです。ただ子供を守りたい、何も理解しようとしないう大人達に現実を見据えてほしい、この信念こそが先生の原動力だと思います。

本を読み終えた後、私は自分が無力に感じました。もちろん先生のような人は特別です。しかし、同世代の人たちが抱えている問題や悩み、それを知らずしなかった自分が情けなく感じました。苦しみ、自ら命を絶つ人がいるのにそれをただ他人事にしてしまうのはあまりに無責任すぎると思いました。

私は無力です。苦しんでいる人達の相談を受けられなければましてや先生のように行動を起こすことなどできません。しかし、力を持たない私にだからこそ考えられることがあります。まずは同世代の人達をもっと知ることから始めたいです。

もう一つ思ったことは回りの大人達への憤りです。大人の方はニュースを見ても「少年犯罪」について親のしつけはどうなんだ、学校の指導はどうなんだと身近な「大人」を責めます。近所での少年犯罪が「怖い、警察の捜査は万全か」という始末です。批判だけで自分は悪くないのでしょうか？実は気づく機会があったのではないかと？大人への疑問は募るばかりです。大人の方は子供を軽視しすぎだと思います。自分の子供だけをしつけ、問題が起こると学校の責任にする。こんなに汚い生き物がいるのでしょうか？子供の目線では飛躍的な技術開発をする人より、難病を治す薬を作る人より親身になって自分と

接してくれる大人が必要だと思いました。

水谷先生は「救えず亡くなった人たち」を「自分が殺した子達」といっています。先生は「僕は天国にいける資格なんかありません。今まで二十数人も殺した男ですよ。」と言います。ならば現実を見ず少年犯罪を考えない大人はどこへ行くのでしょうか。残念ながら私が向かうのは批判する大人です。しかし、今考えた思いを忘れず、少しでもほんの少しでも先生の理想に近づくと大人になりたいと思いました。

『フェルマーの最終定理』
サイモン・シン 著

『フェルマーの最終定理』

2 C 西川 剛

この本はフェルマーという十七世紀の数学者が証明を書かずに書き残した定理が二十世紀になって証明されるまでの、多くの数学者たちの挑戦を紹介した本です。といっても数学的な手法を詳しく解説してあるわけではなく、むしろ学者たちがどのような人生を歩んで業績を残し、それによってどのように数学が発展してきたのか、という所を焦点にしています。

事の発端はフェルマーが教科書代わりに使っていた「算術」という本の中に

「一般に、二乗よりも大きいべきの数を同じべきの二つの数の和で表す事は不可能である。私はこの命題の真に驚くべき証明を知っているが、余白が狭すぎるのでここに記す事はできない。」

という思わせぶりのメモが書いてあるのが発見されたことです。このメモ書きを含んだ本が刊行されてから数多くの数学者がこの証明に挑みましたが誰一人として証明することができず、数学界で最も難しい問題として語り継がれることになりました。その後、三百五十年もの間この問題は未解決のままでしたが、一九九三年にワイルズという数学者がこの定理を証明し、当時の数学界は騒然となりました。

確かにこの定理を証明することは尋常な難しさではありませんし、それをやってのけたワイルズは非凡な数学者には違いありません。しかし、この定理が解けたからといって私たちの生活が便利になるわけでもなく、世界平和が実現

するわけでもありません。実益がないのであれば、数多くの数学者たちを三百五十年間もこの問題にのめり込ませる魅力とは一体何なのでしょう。

一つに功名心というものがある、とこの本では述べています。この証明に成功した人は、歴史に残っている数々の有名な数学者にできなかった事を成し遂げた、という名声を勝ち取ることができるでしょう。しかし、この理由はもう一つの理由から生まれた二次的なものだと僕は思います。もう一つの理由として本書が述べているのは、クイズを一つ解いた時の無邪気な満足感、です。

クロスワードや数独などのパズルゲームが好きな人はたくさんいると思います。そういう人に好きな理由を聞けば大抵の人は問題が解けたときの満足感、と答えると思います。それは高度な数学の世界においても変わらず、問題が解けた時の純粋な喜びを得たいが為に数学者は三百五十年もの間、フェルマーの最終定理という途方も無い難問に挑み続けたのです。

化学や物理学、天文学など、現代では学問は数多くの枝分かれをしています。それらの元をたどれば、知識を応用して世界を住みよものにしたい、という欲求などではなく、人間の本来持っている純粋な、この世界の仕組みを知りたい、という欲求に行き着くと思います。その知識は当時、単純に好奇心を満足させるだけのもので、それを応用して実益を得るという考え方はその副産物のようなものではないでしょうか。その事は本書の

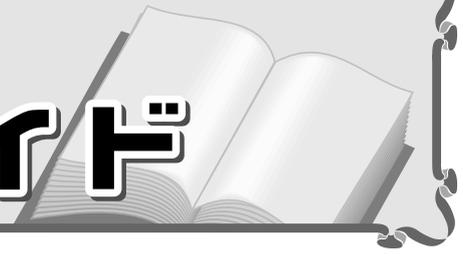
「 π が無理数だと知ったところで何の役にも立たないだろうが、知ることができるのに知らないでいるなんて耐えられない。」

という言葉に代表されると思います。

もちろん学問で得た知識を応用によって役立てるといっても大切でしょう。しかし、最初に学問を作ったのが人間の純粋な好奇心であったように、これから学問を前へ進めていくのも応用の実益ではなく、純粋な好奇心であると思います。自分がこれから勉強を進めていく中でもこの考えを大事にしていきたいです。

学生会図書委員による

ブックガイド



本に対する価値観

4M 山内 義夫

「文庫は我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで“小さな巨人”としての地位を築いてきた。」(角川歴彦 電撃文庫創刊に際して より)

私は中学校まで本といえば漫画か各教科の教科書くらいしか読んだことがありませんでした。高専に入ったころぐらいに、あるアドベンチャーゲーム(選択肢を選びながら文章を読み進めていくゲーム)がきっかけで、活字を読む量が増えました。それまで、漫画しか買って読んでなかったのですが、「たまには小説でも買ってみるか。」と思いました。そして、文学書らしきものを一冊買いました。結果だけいうと、未だにその本は読み終わっていません。

このような本は、私と相性が合わず読んで途中で疲れてきます。精神的にとても。

そして、私に合う本が無いかと、あきが来ずに最後まで読みきれぬ本は無いかと探しました。すると、文庫本(ライトノベル)という種類の本を見つけました。その本は読んでみると、話の内容が幻想曲(ファンタジー)で私にとって読みやすく、活字に飽きてきたときに、挿絵を見て活字に対する疲れが取れる。そして、これなら読みきれんと思って買ってかえって読みました。そして私は、初めて、小説なるものを読みきって感動できました。まあ、2週間かかって読んだんですがね。

それでは、私のお勧めのライトノベルを紹介して終わろうと思います。まずはじめに日日日(あきら)さんの『狂乱家族日記』と『アンダカの怪造学』。おかゆまさきさんの『撲殺天使ドクロちゃん』。懼末 高彰(かいま たかあき)さんの『学校の階段』熊谷 雅人(くまがい まさと)さんの『ネクラ少女は黒魔法で恋をする』。高橋 弥七郎(たかはし やしちろう)さんの『灼眼のシャナ』。谷川 流(たにがわ ながる)さんの『ボクのセカイをまもるヒト』、『学校を出よう!』そして『涼宮ハルヒの憂鬱』このシリーズは【憂鬱→溜息→退屈→消失→暴走→動揺→陰謀→憤慨】という順番です。本田 透(ほんだ とおる)さんの(アストロ!乙女塾!)

絵本を楽しむ

4S 谷 宗一郎

皆さんは絵本を読まれるでしょうか?私自身は、同世代の方よりは、少し多く読んでいます。こんなことを言うと、子どもっぽいなどと思われるかもしれませんが。絵本は子どもの読むものだ、と。しかし、果たして絵本は子どもだけのものなのでしょうか?これは人の受け売りになるのですが、「児童書は子どもしか楽しめないのではなく、子どもでも楽しめるものだ」と、私は思います。そして、これは絵本にも言えるでしょう。確かに、ごく幼児向けに書かれた絵本も多くありますが、それがそれ以外にも、大人でも十分に楽しめる絵本はあります。明るい話、悲しい話、笑い話、感動話…、ストーリーをひとつ見ても十分に幅があります。また、明確なストーリーが無いようなものでも、イラストとわずかなテキストからストーリーを思い浮かべるということも出来ます。もちろん秀麗なイラストや写真を楽しむのも良いものです。このような要素から考えても、絵本は大人でも楽しめるものと思われまふ。

さて、ここからはそんな大人でも楽しめると思われる本を、2つ3つ紹介します。まずは、『ぼちぼちいこか』(著/マイク・セイラー 訳/今江祥智 刊/偕成社)です。この絵本はかばが主人公の話なのですが、テキストがすべて大阪弁で訳されており、テンポの良さも相まって非常に面白いです。次は『じごくのそうべい』(著/田島征彦 刊/童心社)です。これは桂米朝の傑作「地獄八景亡者戯」の翻案なのですが、落語調の語り口とどたばた劇のようなストーリーが楽しませてくれる名作です。最後は『もこもここ』(著/谷川俊太郎 絵/元永定正 刊/文研出版)です。この絵本には、明確なストーリーはありません。簡単な図形のような絵と擬音のテキストだけです。しかしそれ故に、次の展開を想像し楽しむことが出来ます。

ここで紹介した本はかなり有名な本なので、市立図書館などにあると思います。もし興味が湧かれたなら、探してみるのはいかがでしょうか?

図書委員お勧め（光文社『科学パズル』）

4S 吉川 尚男

私がお勧めするのは光文社より出版されている『科学パズル』。これは題名の通り、科学の知識を用いてパズルを解いていくパズル集である。これを取り扱っている分野は物理学が多いのだが、読んで損をすることはない本である。

内容は小学校の理科レベルから高校の科学レベルまでと広い範囲であるが、どの問題もうろ覚えでは解くのが難しい問題がほとんどであり、また引っかけ問題もいくつか含まれている。それらの大半は見かたを変えることで解くことが出来る問題である。

この本は物理学が好きな人間はもちろんだが、私は物理が苦手な人にこそ読んでほしいと思う。なぜなら、この本は解答と一緒になぜそうなるかの解説も載せているからだ。一回読むだけでは難しく理解できなくても、何度か読んでいくうちに理解できる代物だ。発想力はもちろん、物理学に必要な知識も得られるのでぜひ読んでほしい。

また、同じく光文社より『頭の体操』と呼ばれる本も出版されている。こちらは科学の知識のみならず、数学、算数の知識や雑学が必要となってくる問題が集められている。こちらは問題を解くことよりも、解説を読むことによって雑学を得ることのほうが多いだろう。先にあげた科学パズルもそうだが、この二つはシリーズ化されており、何冊もの続編が出版されている。残念ながら図書館には全巻そろっていないが、興味があるなら古本屋めぐりで探してみてもいいだろう。

なお、図書館には意外とクイズ集が多い。その中でも数学に関するものが多いので、発想力を鍛えるためにもぜひ一読してほしい。

読みやすく楽しい本

3C 水谷 祐介

今回お勧めさせていただきますのは、「宮部みゆき」と「乙一」の作品です。

『模倣犯』、『ブレイクストーリー』。この二つの名前を聞いて、「あれ？」と思われた方は多いのではないのでしょうか。それぞれ、数年前に話題になった映画（ドラマ）と去年話題になった映画の名前です。そして、ここに名前が出てきたことからわかるかもしれませんが、どちらも宮部みゆきの作品です。意外に思われる方もいるかもしれませんが。一方はシリアスなサスペンス、もう一方はアニメ。同じ作者の作品とは思えませんから。ただ、この二つの作品は共通して「ブレイク（死語？）した」と言えると思います。なぜ、似ても似つかないような二つの作品がどちらも人気を博したのか。これは「宮部みゆきの作品は面白いから」としか言いようがないと思います。

宮部みゆきの作品は「人間の内面」をサブテーマにしたようなものが多く、実は結構「重い」作品だと個人的には思っています。ではなぜ、手軽に読めて楽しめてしまうのか。それは文章がとてもわかりやすいからです。どんなに難しいことが書かれていても、その文章が単純明快ならば楽しく読めてしまうのです。ちょっと真面目な本を読んでみようと思うけど小難しいのはイヤ、という人にピッタリなのが宮部みゆきの作品です。

一方、映画化もドラマ化もされていない乙一の作品ですが、わかりやすく面白いという点ではこちらも負けていません。乙一の作品は全体的に「ちょっと怖い（暗い？）」系ですが、その中で「人の温かさや繋がり」という大切なことをさりげなく出してきています。真っ暗な夜の薄い月明かりといったところでしょうか。絶望的なのはイヤだけどちょっとブルーが入ったのを読みたいという人にお勧めです。

良い本に出会って楽しんで下さい。

編集後記

今回も素晴らしい読書感想文をたくさん掲載することができました。自分も読んでみよう！という気持ちになった人もいないでしょうか。また、学生会図書委員からのおすすめ本コーナーもあります。こちらも面白そうですね。春休み、読書三昧っていうのはいかがでしょうか。

お忙しい中原稿をお寄せ下さった先生、学生の皆さん、ありがとうございました。

（図書館）

奈良工業高等専門学校図書館

〒639-1080 大和郡山市矢田町22

TEL 0743-55-6015

URL <http://library.nara-k.ac.jp/>